

ワシントン情報、裏 Version

2005年6月1日

竹中 正治

「悲劇のループ:映画 Star Wars, Revenge of the Seth」



【盛り返した完結編】

スターウォーズ・シリーズはエピソード1の“Phantom Menace”あたりから私には新鮮さが感じられなくなった。前回作のエピソード2“Attack of Clones”も見たが、あまり記憶にも残らないほどの薄い印象で終わった。だから今回の完結編エピソード3“Revenge of the Sith”にも期待していなかった。しかし、さすがに完結編、前回2作とは異なり、見応えがあった。

ご存知の通り、このシリーズは“Star Wars”として1977年に発表されのがエピソード4で、その後エピソード5“The Empire Strikes Back”、エピソード6“Return of the Jedi”と物語の年代順にストーリーが展開。その後、前史に遡ってエピソード1, 2, 3と製作、発表された。この「宇宙チャンバラ大活劇」の完結編“Revenge of the Sith”では、これまでの5回の物語を通して残されていた「最大の謎」が解き明かされる。すなわち、ルーク・スカイウォーカーの父でジェダイであったアナケン・スカイウォーカーは何故ダークサイド(闇の力)に転向し、ダスベエダとなって帝国とエンペラーに仕えるようになったのか？

【悲劇の筋立て:アナケンはなぜダークサイドに転向したのか】

ジェダイのオビワンによって見出されたアナケンは成長し、武功を上げ、共和国のジェダイとして活躍していた。ジェダイというのは銀河共和国を守護する一種の超能力騎士階級のようなものである。ジェダイの中でも指導者クラスはマスターと呼ばれる。ジェダイ・マスターは評議会のメンバーとなり、政治的・軍事的な権力を持ち、“Senate”と呼ばれる共和国議会に忠誠を誓っている。

アナケンとの恋に落ちたパドマは妊娠し、子供の出産を待つ幸せな夫婦となるはずだったが、アナケンは悪夢にうなされる。最愛の妻パドマが出産とともに死んでしまう悪夢が繰り返される。アナケンはこれが予知夢であると理解し、不幸な未来をなんとしても回避しようと決意する。

共和国のチャンセラー(首相、議長?)はアナケンに目をかけ、アナケンはチャンセラーを信頼するようになる。ところがチャンセラーはシス(Sith Lord)だった。シスというのは固有名詞ではなく、集合名詞である。シスはジェダイと同様にフォースを操るが、彼らは憎悪の情念を基底にしたダークサイドの力を信奉している。当時、共和国はドロイド軍(ロボット兵団)の攻撃を受けていた。実はこれはチャンセラーの仕組んだ「やらせ戦争」であり、彼はドロイド軍の黒幕として共和国を攻撃させ、戦争状態を継続させることで、共和国での自己への権力の集中を維持していた。

チャンセラーはアナケンに「ダークサイドの力はジェダイの力よりも遥かに強力であり、その力を手にすれば、パドマの死の運命さえも回避することができる」とアナケンに味方につくとそそのかす。チャンセラーがシスであったことを知ったアナケンは一旦はジェダイ評議会の指導者にこれを伝え、ジェダイ・マスターらがシスの捕縛に向う。シスとの戦闘でジェダイ・マスターがシスにとどめを刺そうとした時に運命が暗転した。シスが死ねば妻パドマの死の運命を回避できるダークサイドの力

も失われてしまうことを畏れたアナケンは、衝動的に介入し、あろうことかジェダイ・マスターの殺害に加担してしまう。これを契機にアナケンはダークサイドの力にとり付かれ、シスの手先に転落する。

アナケンを味方に引き込んだシスは、ついに共和国を帝政に移行させ、自分が皇帝として君臨するために障害となるジェダイ集団を抹殺するクーデターを開始する。アナケンはシスの指令でジェダイ聖殿の子供達(訓練を受けている次世代のジェダイ)も殺してしまう。この後、アナケンは自らの師であったオビワンと対決することになる。ヨーダも同時に、皇帝シスに戦いを挑む。

ダークサイドに転落し、ジェダイ殺害の手先となったアナケンの変貌に妻パドマは、悲嘆絶望する。パドマはオビワンによって救出されるが、深い絶望のあまり生きる気力を失った彼女は双子を産み落として死んでしまう。アナケンの予知夢は現実となったのだ。この双子が後のルーク・スカイウォーカーとレイア姫である。

【不条理な因果律:悲劇のループ】

映画を見てこのプロット(筋立て)に、「あれ、ちょっとおかしいじゃない?」と思ったら、あなたの論理感覚は正常である。妻のパドマが死ぬという未来予知がなければ、アナケンはシスのダークサイドへの誘いにのらなかったであろう。その結果、パドマの絶望と死も起こらなかった。従ってパドマの死の予知夢も起こらなかったはずだ。つまり因果関係が循環しているのである。不条理ではないか?

ひとつの解釈としては、パドマの死の予知夢はシスがアナケンの心に仕掛けた罠だったと理解することもできるかもしれない。パドマが死ぬ悪夢にアナケンの悩まされていることを、シスは言わずに気がついていたらだ。アナケンの予知だったのか、それともシスのマインド・コントロールだったのかはともかく、予知夢は現実となった。

不幸な未来予知があり、それを回避する人間の選択が逆に予知された不幸な結末の原因となるというプロットは、実は古典的な悲劇のプロットである。「映画“Million Dollar Baby”:生と死の淵における孤独な決断」でも引き合いに出したが、ギリシア古典悲劇の「オイディプス王の物語」を思い出して頂きたい。「今度生まれてくる自分の息子に殺されるであろう」という神託を受けた王は、生まれた子供(オイディプス)を捨てる。しかし子供は拾われて、自分の出生を知らぬままに育ち、旅の途中で偶然遭遇した王を父と知らずに殺害してしまう。この物語を始めて読んだ時(高校生の時であるが)、「おかしいじゃないか?」と感じた。未来予知の神託がなければ王は生まれた子供を捨てることもなく、子供が自分の出生を知らずに王を殺害することもなかった。従って神託も成り立たなかったはずである。「未来予知→回避行動→予知の自己実現」という通常の因果関係では有り得ない連鎖となっている。ジョージ・ルーカスはアナケンのダークサイドに転落し、ダスバエダとして悪の皇帝の手先になる筋立てに、古典的な悲劇のプロットを使用したのである。

映画 Matrix Reloaded でも、主人公ネオは最愛のトリニティーがビルから落ちて死ぬ夢に悩まされた。やはりこれは予知夢で、やがて Matrix 内での現実(?)となる。しかしこの場合は、未来を予知した上での主人公ネオの回避行動が、予知された結果の原因とはなっていないので、通常の因果律は崩れていない。

通常の因果律では現在から未来へと原因と結果の連鎖が起こるのに、この種の悲劇のプロットでは、未来が現在の原因となり、同時に現在が未来の原因となるようなループ状に閉じられた形になっている。どうしてこうした転倒した構造が悲劇のプロットと受け入れられるのであろうか?

【予想の自己実現】

まず考えられることは、「悲劇を回避する選択が悲劇の原因となる」という筋立てが、悲劇を「逃れられない運命」として描くことで、運命に捕らわれた人間の絶望を強調する効果があるのだろう。古代ギリシア人は、その運命の契機となる未来予知を「神託」として描き、現代のSFは未来予知超能力として描いたのだ。しかしこうした筋立て上の効果が、古今東西受容される理由は、人間の基本的な存在のあり方に根ざしているのかもしれない。

私達人間は、頭の中になんらかの「観念化された外界のモデル」を持っていて、このモデルをシュミレーションすることによって、これから起こることを予想し、自分の行動を選択しようとする動物である。例えば、あるニュースに接して、大勢の市場参加者が株式を売り、その結果相場が下がると予想すれば、株式を売るという行動を選択する。同様の予想と選択を多くの市場参加者が行えば、「相場下落の予想」は自己実現的に相場下落の結果する。上げ相場では逆の方向に同様のことが起こる。こうした予想の自己実現効果は相場現象に止まらない。社長が会社の将来に悲観的になれば、社員にも悲観的な予想が広がり、優秀な社員は会社を見限って他社に移り、結果として業績は益々悪化し、ついに会社は破綻するかもしれない。このような不幸の自己実現プロセスを私達は経験しているからこそ、因果関係がループ状に閉じた悲劇的運命の筋立てを受容するのではなかろうか。

【運命のループを断ち切る者：“Return of the Jedi”の含意】

勿論、人間自身も含めた物理的存在としての外界は、主観的な意識からは独立した実体を持っている。従って「売るから下がる、下がるから売る」というループ状の因果律が産み出すトレンドはどこかで限界に達し、永遠には続かない。行過ぎた相場は反転する。予想の自己実現のプロセスはやがて自己否定のプロセスに転じ、予想は裏切られ始める。

こうして、悲劇の運命にもループ状の因果律が壊れる時が来る。アナケンとパドマの残した双子、ルークとレイアは帝国皇帝とダスベータにやがて戦いを挑む。エピソード5“*The Empire Strikes Back*”で、ダスベータはルークとの戦いの中で語る。“*I am your father. This is your destiny. Join us.*”ダスベータは運命の繰り返しを説いているのである。これに対して“*No!*”と叫ぶルークはエピソード6“*Return of the Jedi*”で運命の繰り返しを拒絶し、ダスベータに決戦を挑む。ルークとの戦いに敗れたダスベータは、自分が捕らわれた運命の罠を断ち切る戦いを息子ルークがしているのだと悟る。再び立ち上がったダスベータは、ルークにとどめを刺そうとしていた皇帝を倒して、自分も息を引き取る。

私は長いこと判らなかつたが、今始めて判った。“*Return of the Jedi*”とは「ジェダイに成長したルーク・スカイウォーカーの反撃」のことであり、死の間際にダークフォースの呪縛を絶ち、本来の心を取り戻したアナキン・スカイウォーカーのジェダイとしての復活のことだったのである。

以上